

ヲ履キ漁夫ハ素跣ナリ

家屋

商民ハ小田原葺又ハ瓦葺ノ屋ニ住シ農民ハ菅葺ノ屋ニ住ス其間取方

ハ第一圖ノ如ク漁民ハ小田原葺ノ陋舍ニ住居ス第二圖ノ如シ

飲料水

（図省略）

飲料ニ用ユル水ハ井戸水ニシテ井戸ノ構造ハ鎌倉地方ト同ク深底ヨリ上側迄デ
角石ヲ積上ケ又ハ四石ヲ累築セシハ地質甚弱ナレバ之ヲ防ク為ニ設ケシモノニ
テ其上部ノ側ニ丸太木ヲ井桁二組ミ或ハ角石ヲ円形ニ成シム第二圖第四圖ハ乃チ
井戸構造ノ断面ヲ示ス

食物

商民ハ米飯ヲ農民ハ米粟ノ混合飯ヲ漁民ハ米麦ノ混合飯ヲ常食トシ其ノ
副食物ニ魚貝海藻ト蔬菜ヲ用ユ

燃料

落葉（松葉）流木（浪ノ為ニ打上シモノ）畑作物ノ枯幹及ヒ株根、柴等ヲ用ユ

運搬具

小荷車、荷馬車、天秤、イチコ藁ニテ作る（図省略）、ヤセンマ（図省略）、草薙籠

（前文ニ掲ケシ藁製ノ品ハ方言名ヲ知ラザルニヨリ仮ニ磐城方言名ヲ借字セシム）

宗旨

漁民ハ海神ヲ祀リ農民商戸ハ道祖神及ヒ稻荷ヲ祭ル

子供ノ遊戯

漁民ノ子供ハ海汀ニ集リ競フテ玩具ノ小舟ヲ浪ニ浮ベ帆走ノ工合ヲ評ス（此小舟
ハ父兄ノ手作ニシテ丸木ヲ鑿チテ船身トシ中央ニ柱ヲ建テ帆ヲ縣ダルモノ）又タ
磯ヲ涉テ小魚ヲ釣リ或ハ手捕シテ後子砂上ニ團座シ流木ヲ焚テ獲魚ヲ
火中ニ投シ焼了テ之ヲ食フ女子ハ砂上ニ輪座シテ小石ヲ玩フヘ怡モ「オテダマ」ノ
如クス

方言

アルカ（アンメイ）行ク（イクベイ）イツイクノカ（イツイクノサヨ）「サヨ」ハ凡テ語尾ニ用ユ

海濱（スカ）父母子カ子ヲ指テ「ワレ」ト呼フ

レバ農夫ノ畠ヨリ掘リ來テ置キシモノナラン想ニ鎌倉時代ノ石塔ナルベシ是等ヲ見
了ニ伊藤邸南方ノ小路ヲ行ケルニ土工ノ人夫濱方ヨリ石ヲ畚ニ入レ運ブニ逢フ

〈図省略〉

其畚ヲ視ルニ「田の字」形ニ藤蔓ヲ曲ケシモノニテ第四圖ニ示ス如ク誠ニ簡便ノ作方
ナリ小路ヲ過ギ松林ヲ經テ濱手ノ砂山ニ登レバ頂ニ納屋アリ之ヲ観ルニ異様
ノ構造ナレバ先ツ後面ノ様ヲ圖寫(第一圖)シテ其前面ニ廻レバ入口アリ之ニ於テ前
面(第二圖)ヲ寫シテ屋内ニ入り内側ヲ視ル際何方ヨリカ村童來テ予カ拳動
ヲ窺フ次テ山下ノ汀ヨリ漁夫一人登來テ誰何ス之ニ對シ予ハ答へ曰ク大磯滯在
ノ者ニテ海辺遊歩ノ途次遇々此舍ヲ視タレバ學問上ノ参考ニ見居ナリト述ルニ
彼レ一人安心シテ休フ倚テ彼人ト問答スル左ノ如シ

問 当舎ハ何ノノ為ニ設シヤ

答 漁具ノ置場ニ建設ス

金貨ハ何ント称スヤ

納屋

当舎ヲ建築ニ何材ヲ用シヤ次ニ建方ハ奈何ニセシカ

答 当舎ントスルニ臨ミ先ツ第一ニハ砂中ニ数ヶ處ノ孔ヲ掘リ根入一戸許ニ

丸太ヲ建テ桁梁等ヲ加ヘ棟木ヲ載セ屋形ヲ造リ其材ニハ栗丸太及ヒ丸竹

ヲ用ヒ屋根及ヒ側壁ノ部分ニハ栗莖ヲ用ユ

屋根ヲ葺クニ栗ノ根株ヲ外面ニ出セルハ水コケ能クシテ腐ラザル為メ又夕側

壁ヲ覆フニ栗莖ヲ倒シマニスルハ久シキニ堪ヘシムル為ナリ

当舎ヲ見張糸屋ト思シニ左ニ非シテ漁具置場ナレバ夫ノ備フルモノハ何

品ナルヤ

当舎ハ網置場ニシテ舍内ニ積メルハ繩及ヒ麻糸ニテ造リシ地曳網及ビ

細布ノ袋網ナリ

細布網ハ何魚ヲ獲ルニ用ユルカ

白魚(方言シラス)ヲ漁スルニ用ユ

地曳網ハ何魚ヲ獲ルニ使フヤ

当地ニテ麻網ヲ染ムル料ニ何シノ汁ヲ用ユルヤ

柏皮ノ煎汁ヲ以テ染ムルナリ

地曳網ニ用ユル繩ハ何品ナルカ

稻藁ノ葉ヲ去リシ莖ニテ繩ニ撲リシモノナリ

地曳網ノオモリ石ヲ繩ニテ編メル仕方ヲ見タシ

易ギ業ナリト云ヒツ、砂中ヨリ小石ヲ拾ヒ莖繩ヲ以テ編ミ付チ直ニ一個ヲ呈ス

当地ニテ海面ヨリ高キ砂原ニ舟ヲ置ケルハ何ノ譯ナルカ

平常浪靜ナルはハ海汀ニ置ケド風雨ノ兆アル節ハ之ヲ防ン為メ當舎

後方ノ松林砂原ヘ揚ケ置キ恆ニ苦ヲ以テ覆ヘリ其舟ヲ海汀ヨリ曳上グル仕

方ハ先ツ舟底ニ「スラ」ヲカヒ次ニ舳ニ繩ヲ結付ケ山上ニ居ル數人之ヲ引クヤ

舟端ニ居ル數人ハ艤又ハ側ニ肩ラアテガイツ、押上ケ遂ニ砂山ヲ越シテ

松林中ニ据シム

シケノ際高浪ハ當舎適打上ルアリヤ

非常ノ「シケ」ナレバ當舎適浪ヲ延ボシ次テ濱砂ヲ吹上ケ松林ヲ被フアリ

強風ノ時ハ砂ヲ何ツ方迄吹キ飛スヤ

停車場附近ノ地适モ延ボシ就中濱手ハ一層列ヶレバ海辺ヘ向ヘル松樹ノ枝

幹ハ之方為メ場害セラル

以上ノ如ク問答シテ知得スル一対ザレバ厚謝シテ漁夫ニ別レ砂山ヲ降ソテ海汀ヲ歩ム

數丁ニ延ビ後方ヲ顧レバ納屋ノ地位ヲ望ムニ適當ノ距離ナルニヨリ砂上ニ佇ミ其眞

況ヲ圖寫(第三圖)シテ鳴立澤ノ汀ニ至リ玩具用ノ小舟ヲ拾フテ寓舎ニ帰ル

〈図省略〉

大磯土俗ノ概略

冠物

商民ハ帽ヲ用ヒ農民ハ笠等及ヒ手拭ヲ被リ漁民ハ竹皮笠ヲ被リ或ハ手拭ヲ

鉢巻ニ為ス

衣服

商民ハ普通ノ衣服ニシテ農夫筒袖短衣ト股引ヲ用ヒ漁夫ハ筒袖ノ長衣ニ

三尺帶ヲメ勞働ノ際ハ腰袋ヲ着シ又ハ裸体ナリ

雨具

商民ハ傘ヲ用レド農漁ノ一民ハ笠ヲ着ス

履物

商民ハ雪駄、駒下駄、足駄等ヲ用レド勞働者ハ素跣ニシテ農民ハ「ワラジ」、足中、

〈図省略〉

又砂上ニ長繩數十筋于セルアリ之ヲ覽ルニ其末端ニ大ナル針アリテ「アギ」

アルト「ナキ」ノ一種ニシテ針ノ緒付ヨリ一尺許ノ間ハ「ハリガ子」ヲ巻ケリ圖ニ示スガ如シ

〈図省略〉

遇マ漁夫ノ來ルアレバ此針ハ何魚ヲ獲ルニ用ユルルヤト問ヘバ彼レ曰ク鮫ヲ漁ス

ル「ハヘ」繩ニテ丈ケ數百尋アリ其緒付ニ「ハリガ子」ヲ巻ケルハ喰ヒ切ラレザル為メトナレバ詫魚ノ齒ハ鋸ノ如ケレバ之ヲ防グ云々其餌ニ、イカ、サバ、ノ一魚ヲ用ユ

二十日午後西小磯ノ畠中ヲ過ルキ村童ノ芽ヲ刈ルヲ見タレバ其故ヲ問フ彼レ曰ク之

ヲ刈リテ席ニ席ニ蕎麦温飪ヲ調理スル用ニ備フ云々

二十五日熊坂氏來テ過日依頼ノ土俗器ヲ贈ラル甚留左ノ如シ

一 四石 一個 旧持王 北下町 道祖神境内

一 サ、ラ盆踊用 一ツ 同 同 石塚忠太郎

一 鮫スリバリ 二ツ 同 同 尾崎三四郎

〈図省略〉

一 碇 一挺 旧持王 南下町 一毫七

附矢先手縄添フ 旧持王 北下町 山下金七

〈図省略〉

次ニ予カ過日海辺ニテ拾ヒシ有孔石ノ譯ヲ熊坂氏ニ尋ヌルニ左ノ苔ヲ為ス

当地住民ハ耳病ニ羅レルキ全癒祈願ノ為メ海濱ヨリ形ノ宜シキ丸石ヲ

拾ヒ來テ小孔ヲ穿チ糸ヲ通シテ後子携ヘテ小磯宇賀神社ニ詣テ宮ノ扉

又ハ鴨居ニ懸ケルト當俗ナレバ思フニ其石ナラン云々

午後磯崎治右門方ニ至リ同人ト對話ノ刻子供一人小形ノモリ矢先二八九寸

位ノ小魚ヲ貫キ携ヘ帰ルアリ之ヲ見テ治右門ト問苔スル左ノ如シ

問 此子供ハ誰ノ子ナルカ

答 我ガ孫ナリ

此小形モリ矢先ニ魚ヲ貫ケルハ子供ノ戲レカ

答 我ガ恵ハ「ムグリ」ヲ營業ニシテ日々海中ニ入り鮑採ヲ為ス故ヘ護身用ト

シテ小形「モリ」ヲ携フ夫レヲ孫カ持チ帰タルモノナレバ玩具ニアラズ
護身用トシテ「モリ」ヲ携フハ何ノ為カ
海中ニ潜リ鮑ヲ採ルキ種々ノ魚集リ來テ裸体ヲ喰ムノ患アレバ之ヲ防ガ
為メ「モリ」ヲ携フ若シ來ルアレバ突刺スナリ

問

海中ニテ「モリ」ハ奈何ニ持ツヤ
柄ニ付ケシ緒ヲ肩ニ掛け居リ魚采レバ身構シテ突ナリ

問

此「モリ」ハ何尺位ノ魚ヲ獲ルカ
右ノ問答終テ「モリ」一本ヲ譲受ケ其圖左ノ如シ

〈図省略〉
磯崎方ヲ出テ海辺ニ赴シニ漁舟ノ帆掛シテ沖ヨリ帰来セルヲ覽ル着岸ノ後子奈何ニシテ舟ヲ曳揚ルカト砂上ニ二枚之ヲ見居リシニ夫ノ着岸スルヤ舟子共砂上ニ置キシ「ス

ヲ」ヲ汀ニ持チ行キ舟底ニ入レバ舟中ノ舟子飛下ソテ網ヲ砂上ヘ引張ルヤ陸上ニ待子シ
舟人群カリテ詫網ヲ曳ケト共ニ又舟中ノ舟子ハ飛下テ轡押木ニ肩ヲ懸ケ「エーヒ、
エーヒ」ノ掛声ヲ發シ砂上ニ舟ヲ揚ケシム之ヲ覽了テ海水浴場ヘ赴ク途中砂上ニ
据ヘアル舟ノ種類ヲ通覽スルニ約子左ノ如ク

問

此「モリ」ハ通例ノ長サナレバ尺五六十寸以下ノ魚ヲ突キ得ルニ堪ユ

問

一 漁舟 長五間巾六七尺

一 附属具 帆柱一本 艤押木合五ヶ処 (両側ニ各一ヶ処) 艤二壺ケ処

一 艤五挺長三間 鉤竿及ヒ「モリ」ヲ懸ル又木四本 (両側ニ一本ツ)

一 棍一挺 丸太若干 碇若干 滾汲甕若干

一 タブ子 (小舟ナリ) 長八九尺巾三尺

一 附属具 艤一挺 艤押ヘソ一ヶ処 (艤ニアリ) 碇一挺

一 滾汲甕一個

是等ヲ視了テ帰途漁夫ノ子供ヨリ玩具ノ小舟ヲ譲受ク左圖ニ示セル如シ

〈図省略〉

小磯村土俗再調査
八月廿七日西小磯ノ村口ニ赴キシニ右側松樹ノ下ニ佛像ヲ彫刻セル碑及ヒ石塔并ニ注

連ノ在ルヲ認メシヨリ傍ノ農家ニ付キ尋子バ主人曰ク石像ハ村民尊信ノ道祖神

ナレバ毎歲注連飾ヲ捧ゲ後子焼ニシメバ其残片ナリ云々之ニ於テ参考ノ料ニセシ

ト欲シ石像其他ヲ圖寫スル左ノ如ク第一圖ハ道祖神ニシテ版石ニ佛像ヲ彫メルモノ第二圖ノ如キ石ト第三圖ノ如キ石ハ版石ノ側ニ積ミアリ此物タル石塔ノ一部分ナ

其姓名ハ 鈴木フク 藤間キン 平田シマ 小嶋サク 鈴木ノブ
 齋藤ツマ 鈴木ハナ 真間カツ 宮代キソ 木村ロク
 古沢タケ 飯田カン 鈴木トメ 高橋キソ 加藤トメ
 加藤トヨ

此者ノ内ニテ執練者ト思シキ一人ニ質問スル左ノ如ク
 問 足下等ノ内ニ音歌取アリヤ
 問 十六人ノ内ニテ五人ハ音歌取ナリ

問 歌曲ノ文句ヲ唱へ聞セヨ
 問 奏等ガ謡ヒシ文句ヲ唱へ聞スベシ

之ニ於テ娘一人ニ詰セツ、傍ヨリ文句ヲ筆記スル三ハ左ノ如シ
 一 「マハルク、＼＼、ミナサン、マルク、コレホドシロイ、コテンノオニワニ、コレホト
 シロイ、ゴテンノオニワニ、ヤレセジヨ、オセマヤ、シロゴザニ、＼＼。」
 二 「マルイタマゴハ、キリヨデシカク、モノ、ユイヨデ、カドガタツ、＼＼。」
 三 「オナツラウチデハ、ナニシヨウバイヨ、コジキヲトメテ、シギヨウニデタラ、
 シギヨウデクワレヌ、オナツラウチデ、コレデモ、オナツハ、デシヤバルナ。」
 四 「オラクラウラデ、ヨルナクトリハ、トリジヤゴザラス、イロオトコテゴザル、
 オラクニ、デロデロ、デロトナリ。」

〈図省略〉

以上ノ文句ヲ聽キアテ娘等ヲ退散セシメ熊坂氏ニ質問スル左ノ如ク
 問 此踊ハ毎歳執行スルヤ
 問 徒時ヨリ毎歳七月十四十五十六ノ三日間ニ行ヒ来リシガ陽曆ニ改リテヨリハ一ヶ月延
 問 踊子一組ノ人員ハ奈何
 問 踊子一組ノ人数ニ一定ナシ乃チ大組ハ二千人中組ハ十五六人小組ハ十一人ナリ
 問 今夜連レ来リシ娘等ハ何者ノ兒ニシテ住地ハ何所ナルヤ
 問 山王丁ニ住スル農夫ノ娘ナリ
 問 当地ニテハ一般ニ子女ヲ習踊ヲ習フナリ
 問 商家ニテハ子女ニ習踊ヲ禁スレド漁夫農夫ノ子女ハ一般ニ踊リヲ習フナリ
 問 是踊リハ當国内一般ニ演スル習慣ナルヤ
 問 余方知レル場所ハ大住陶綾ノ一郡ニシテ其他當國ノ他郡ニアルヤ否ヲ知ラズ
 問 今ヤ熊坂氏ガ連レ来リシ踊子一組ノ演舞ヲ覽テ其狀態ノ一端ヲ窺ヒ加フルニ娘等及ヒ

熊坂氏ニ質問シテ歌唱ノ文意并ニ踊リ習行ノ地域ヲ知得スルハ之レ偏ニ熊坂氏ノ盡力
 ナレバ厚謝シテ同氏ヲ帰宅セシメ而テ町内ニテ演スル状況ヲ比較視察セント九時過寓舍
 ヲ出テ南下町ニ至リ視タル踊ノ状況ハ左ノ如シ
 南下町ノ空地ニ今ヲ盛リト演シツ、一組ハ八十餘人ニシテ円形ニ左歩シ一組ハ五六人ニテ円
 形ニ右歩シ唱歌ノ發声ト太鼓サ、ラノ鳴響ト相ヒ和シ各藝ヲ競争セシム其歩様ハ圓
 ノ如ク

娘等ノ容姿服装并ニ見物人ノ状態
 娘等ノ或者ハ手拭ヲ冠リテ單衣ヲ着シ帶ヲ占メ手纏ヲ懸ケ帯ヲ占メ草履又ハ駒下駄
 顎ハシ跣足ナリ或者ハ頭上ニ冠物ナク浴衣ニ手纏ヲ懸ケ帯ヲ占メ草履又ハ駒下駄
 ヲ穿テリ
 斯ル有様ニテ娘等ガ熱心ニ踊レルヲ旅客官物シニ踊子ノ周辺ニハ他丁ノ踊子ト若者ト
 ガ群集シテ是等二組ノ演舞ヲ妨害中止セシメント惡口雜言ヲ吐キツ、小石ヲ投ケ將ニ
 喧嘩ヲ仕カ掛ケン穩ナラヌ拳動ヲ出顎セシム
 之レ南下丁ニ於ケル現状ナレバ何カ基因アント思ヒツ、濤龍館ノ方ヘ南歩スルヤ遇殊老
 母ノ娘一人ヲ従ヒ行ケルヲ視タレバ参考ノ一助ニモナラント尾行シナカラ彼等ノ様子ヲ窺フ
 二老母ハ左手ニ「サ、ラ」ヲ持チ右手ニテ一人ノ娘ノ手ヲ携ヘ何カ話ヲ為シツ、(想ニ踊ノ噂ナ
 ラム)他ノ一人ノ娘ハ太鼓ヲ携ヘ跣足ナリ其素振ヲ察スルニ娘ノ負傷ナキ内ニ家路ヲ指
 テノ帰途ト思レシ彼等ニ尾行シテモ能キ事柄ヲ聞カザルニヨリ南下丁ヨリ本土通ヘノ
 横丁ニテ或ル商家ニ休ヒ予カ今ヤ南下丁ニテ覽シ踊ノ様ヲ主婦ニ話セバ左ノ答ヲ為セリ
 当地ニテ益踊ヲ習フテ演スルハ漁夫ノ娘ニシテ彼レハ一歳中晴レノ場合ト心得數月
 前ヨリ町内ヲ練リ迴テ下稽古ナシ當日ニ至レバ町々ニテ娘等組合ヲ設ケ定メノ
 場所(毎歳同シ処)ニ集リ益踊ヲ演ス乃チ南下丁ハ濱辺ノ空地、北下丁ハ道祖神ノ
 境内ト之レ主タル場処ニシテ其演舞ヤ歌ヲ謡ヒ樂器ヲ鳴ラシ極端ニハ半日相互
 間ニ視タル事柄ヲ種トシテ惡口ヲ吐キ募り踊麥ヲ喧嘩トナレバ娘等ノ父母兄弟共ノ大喧嘩
 テ之ヲ仲裁セズ却テ加勢ノ雜口ヲ言ヒ合フヨリ遂ニハ娘等ノ父母兄弟共ノ大喧嘩
 ヲ演出セシメテ踊リノ狂ヲ結ブハ毎歳ノ常例ナリ鳴呼惡キ習俗ナレハ商家ノ子女
 ニハ決テ益踊ヲ為サシメズト哭笑セリ
 主婦ニ厚謝シテ十時過寓舍ニ帰ル
 海濱ニ於ル視察
 十七日午後海水浴場附近ヲ遊歩ノ際砂中ヨリ圖ノ如キ有孔石ヲ拾フ

享保 明治二十年ヲ去ル一百六十三年ヨリ百八十二年前ニ当ル

明和 明治三十年ヲ去ル一百二十七年ヨリ百三十四年前ニ当ル

等ノ文字ヲ彫刻シアルヨリ考察スルニ是年間ニハ多ク建ラレシナラン其他普通ノ石塔

ヲ覧レバ皆ナ以降ノ年号ヲ銘スルノミ年号ヲ調べ訖テ墓地ノ現況ヲ廻覧シテ前述ノ
目新シキモノ乃チ花籠、其他ノモノ及ヒ墓碑ノ臺石ニ小石ヲ積ミアリシ様ヲ描寫(圖二示)
ス如クノ際農夫來テ墓地ヲ掃除スルアレバ、彼人ニ問答スル左ノ如ク

版碑ヲ墓表ニ現今モ使用セシムルヤ

昔シハ版碑ノ建シガ近クハ普通ノ石塔ヲ建ツルノミ

版碑石ノ產地ハ何處ナルカ

此石ノ產地ハ足柄下郡根府川ナリ

墓石ノ側ニ立テアル「ゴロイシ」ハ何ナルヤ

彼ノ小サキ「ゴロイシ」ハ兒童ノ墓ナリ

墓側ニアル建札ハ何ナルヤ

此建札ハ供養ノ為ニシテ初七日ヨリ七七日迄ノ追善佛字ヲ一度ニ書キ連子タ

ルニテ塔婆ノ代用ナリ

墓側ニ建ラル竿ノ上ニ四角小枝ヲ付シモノハ何ナルヤ

此物ハ方言四道六道ト唱ヘ送葬ノ際蠟燭ヲ付クルモノニテ桃燈ノ代用ナリ

送葬ハ日中又ハ夜中ノ何レナルヤ

当地ニテハ夜中ニ執行セシム

墓側ニ立ラル竹柄ノ籠及ヒ葉付竹ハ追善ノ為メ建シナリ

竹柄ノ籠ハ花籠ニシテ葉付竹ハ追善ノ為メ建シナリ

普通石碑ノ臺石ニ小石ヲ積メルハ何シノ為メカ

誰ガ追善ノ為メ小石ヲ積ミ其譯ハ奈何ナルヤ

幼稚ノ小供ハ天性石ヲ嗜ミテ玩ズ一故ヘ吾ガ子追善ノ為メ父母積メルナリ

當墓地ハ小八幡村内小字原ト称ス

〈國省略〉

以上一回ノ問答ニ殆ント一時餘ヲ消シテ午後五時四十分國府津ニ達シ旅亭ニ休ヒ發車時
刻ヲ尋子バ七時六分ナリト之ニ於テ旧海道ヲ東行シ土俗ヲ觀察セント人力車ニ乗シテ六時
國府津ヲ發シ前川村ニ至レバ農家ノ側ラニ道祖神ノ碑アリ中村川ヲ渡テ山西村ニ達セバ此

地ニモ道祖神ノ碑アリ一ノ宮村ニ至ラントスルは左側屋下ノ濱辺ニ赤鉢巻ヲ為シタル
漁夫ノ宴會ヲ瞰下シテ一ノ宮村ニ至レバ漁夫ノ部落ニシテ赤鉢巻運ノ漁夫ニ逢フ由テ

村人ニ質問シテ左ノ答ヲ得タリ

当村附近ノ漁夫ハ漁獲多キは祝宴ヲ催ス尤モ漁獲ノ多寡ニ従ヒ祝宴及ヒ賞

与ニ數等ノ差アリ乃チ五百円以上赤手拭、一千円以上赤三尺帶、千五百円以上赤下帯、

二千円以上高砂翁染出ノ衣服等ニテ是等賞与ニ應シ祝儀ノ目録ニモ差アリ云々

二ノ宮村ヨリ国府新宿ニ至ラントスル松並木ノ處ヨリ左傍ヲ視レバ十餘丁ヲ隔テ北方ニ

台地アリ其地勢タル石世期ノ遺物ヲ埋蔵セんカト想ハル仍テ車夫ニ地名ヲ尋子ハ中里

村ノ台地ナリト答ヘキ国府新宿ニ至レバ左側ニ松並木ノ大路アツテ奥深キ社地ナレバ何神

ヲ鎮座セルヤト車夫ニ尋ヌニ六所明神ナリト答フ同村東端ニ達シ左方ヲ覧レバ數丁ヲ

隔テ、景勝ノ畠地アツテ附近ノ地盤ヨリ小高キ丘ヲナシ老松点生ノ間ニ農家散在シ奈

何ニモ優勢ノ地ナレバ若シヤ国府ノ遺趾ナランカト追想セラル国府本郷ヲ過ギ西小磯

ヲ經テ台丁ニ達シ下車シテ徒歩シ七時寓舍ニ帰ル

本日酒匂大磯間ニテ覧タル道祖神碑ノ種類左ノ如シ

〈國省略〉

大磯益踊視察

八月十六日午後海辺歩歩ノ帰途南下町通過ノ際女兒ノ「サ、ラ」ヲ鳴ラシ太鼓ヲ打チテ三々

伍々隊列ヲ組ミ繰リ歩ユムヲ視タレバ予ガ寓舍ニ招キ彼輩ノ踊ヲ覧ント熊坂氏ニ

頬ケレバ午後七時過熊坂氏娘輩ノ一組ヲ卒ヒテ寓舍ニ来ル庭内ニ導キ踊ヲ演セシ

ム其踊ノ様ヲ記スル左ノ通り

踊ノ動作ニ於ル一様ノ躰度ヲ為シ歩調ヲ整ヘ歌舞唱ヘツ、樂器ヲ奏シテ円形ニ迴歩

ス(第一圖ノ如ク)樂器トハ小太鼓ト「サ、ラ」(第二圖)ノ器ニシテ太鼓打ガ太鼓ヲ打ツニ其響

ハ同時ニ鳴ラサレ或ハ別々ニ鳴ス尤モ太鼓ヲ打ツハ唱歌ノ發端ニ強ク終句ニ弱シ「サ、

ラ」ハ平等ニ「スラ」太鼓ト「サ、ラ」ノ持子様ヲ述ニ太鼓打ハ左手ニテ小太鼓ヲ持子胸

前ニ捧ゲ右手ニ小棒ヲ持チテ之ヲ打チ「サ、ラ」ハ両手ニテ「サ、ラ」両端ノ緒ヲ握ギリ

腹ノ前面ニ捧ゲ左右ニ屈伸放延セシメツ、「スル」ナリ箇様ノ動作ニテ迴歩スル」殆ンド

一時間許リ數十曲ヲ奏舞シタルニヨリ其唱歌演舞ヲ止メシム

彼輩ハ十年以上十六年以下ノ小娘ニシテ髪ハ「銀杏返シ髪」衣服ハ「單衣ニ帶ヲ占メ手

綱ヲ懸ケ」足ニハ駒下駄ヲ履ケリ

此一組ハ物貢十六人ニシテ内五人ハ「サ、ラ」一人ハ太鼓打ナリ

蓋シ漁民組ニ分レ一組ハ海中ノ「カツギ」ヲ役シ一組ハ陸上ノ役ヲナスモノニテ日没ニ至レバ各戸ヨリ注連飾ヲ持チ來リ海濱ニ積ミ上ケ火ヲ付ケ焼シセシム之ヲ方言「ヤンノヲコツコ」ト称ス

酒匂附近土俗視察

九日午前十一時寓舍ヲ出テ同五十一分大磯停車場ヲ發車シ午後零時八分国府津ニ下車シテ停車場ヨリ徒步シ國府津駅ノ中央ニ至レバ左側ニ道陸神ノ碑アツテ例ノ

田石アリ酒匂村ノ東端ニ達シ農家ニ憩ヒ左ノ質問ヲナス

問 道祖神ハ何處ニアルヤ

答 村内中央ノ左側ニアリ

當村ニテ儀ヲ編ムニ「オモリ」石ヲ使フヤ

「ミガキ」石ヲ使フヤ

草履ヲ「ミガク」ニ丸石ヲ使フ

道祖神ニ円石ヲ供フアリヤ

答 詛石ヲ奉納セシム

此家ヲ出ア指示ノ處ニ至レバ左側農家ノ傍ニ道祖神碑アツテ礎石ノ上ニ数個ノ円石ア

リシ松濤園ヨリノ帰途塗匂小学校東隣ノ森園ニ入リ視レバ素焼赤色ノ祝部破

片敷蓋セルヲ認ム想フニ此辺ニモ曾テ古墳アリシナラム此地ノ土質タル上層黒野土下層

赤粘土タリ小八幡村ニ至レバ左側（海辺ノ方）ニ松林アツテ林後ニ墓地アルヲ認ム之ヲ視シ

ト松林ヲ過ギ行ケバ濱辺ニ接シテ仮小屋アリ内ニ漁舟アツテ側ラニ人居タレバ彼レニ質問セ

ント近カ付キケルニ村人ニアラズシテ非人ト（所謂浮浪人）思シク今ヤ食事ノ際ニテ老人ト小供

二人ナリシ之ニ於テ想ラク彼ガ生活ノ状態ヲ聞カバ参考ノ一資料ヲ得ヘクト彼レノ

傍ラニ座シ一礼シテ左ノ問答ヲナス

問 足下ハ何所ノ者ナルヤ

答 余ハ元ト沼津ノ漁夫ナレド二十金年前ヨリ非人ノ群ニ入り之レト定リタル住處ナク

近年当村ニ移レリ

足下ハ漁夫ナレバ元住地ノ漁法漁具ト当地ノモノト差アルヲ知ルヤ奈何

問 沼津ノモノト当地ノモノト同一ナリ

足下ハ一兒ヲ持テルガ母ハ何處ヘ行キシヤ

余ト不和ヲ生シ何處ヘカ出奔セリ

足下羅病ノキ腹薬スルアリヤ

通常ハ賣藥ヲ腹スレド場合ニヨリテハ「ゼンブリ」ト云ヘル野草ヲ煎シ飲メリ

足下等ノ仲間ニテ婦女出産ノキ出生兒ヲ如何ニ取扱フヤ

婦女出産ノ刻ハ先ツ鍋ニ湯ヲ沸カシ次ニ地面ニ深サ一尺許ノ孔ヲ穿チ油紙ヲ敷キ

凹ボメ之ニ鍋ノ湯ヲ注ギ溜メ分娩後ニテ初湯ヲ為サシム

平日ノ入湯ハ奈何スルヤ

余輩ガ入浴ハ産時ト同シク孔ニ湯ヲ溜メ其辺リニ座シ手拭ニテ掛ケ湯ヲ為スノ

ミ此仕方ハ余輩方如キ非人仲間ニハ一般ニ行ハル

食物ヲ求ムル手段ハ奈何スルヤ

人様（村民）ヨリ残飯并ニ「サイ」杯ヲ惠マレ時ニヨレバ生魚ノ臘臍又ハ酒ヲ買フアリ

買物ヲ為ス錢ハ奈何スルヤ

人様ヨリ惠ミノ錢ヲ使フ

足下ノ所有品ハ何々ナルヤ

御覽ノ如ク茶椀一ツ。土壙一ツ。曲物（飯）一ツ。メンコ（漆工ノ漆入物）一ツ。

藥ノ明壙（酒）一ツ。藁草履。煙管一本。煙草入一ツ。マツチ一。手拭一筋。アンペラ席一枚。

小切レツヅレヌイノカンバンギ一枚。并ニ行李一個ナリ

行李ノ内ニハ何品ヲ入アレルヤ

答 行李ノ内ニハ鐵鍋一ツ。ブンツキ鍋一ツ。鋤一ツ。糸。針。小包丁一ツ。蚊ヤ一張。雨合羽一ツ

以上ノ所有品ハ行李内ニアルモノト身辺ニ出シ置ケルモノニテ彼レカ財産ナリ

才オ老人ニテ紺色腹掛ノ上ニ「カスリ」ノ單衣ヲ着シ三尺帶ヲ占メ髪ヲ野郎ナリ子供ハ六

七才ニシテ頭ハ五分刈ニナシ古手拭ヲ縫ヒ合セタル單衣ヲ被ヘリ今ヤ彼レガ生活ノ状態

ヲ聞知シ得タレバ厚謝シテ若手錢ヲ惠ミ彼レニ別レ傍ラノ墓地ニ至レバ普通ノ墓

處ト異ナリテ種々日新ラシキモノアリ先ツ第一ニ予カ目ニ付キシハ版碑ナレバ其年代ヲ

識ラント數十基ノ碑面ヲ調ベシニ多クハ蘇生シテ文字ヲ讀ミ難カリシガ夫ノ讀ミ得ラ

レシハ皆ナ徳川時代ノ年号ニテ乃チ

万治 明治二千年ヲ去ル一百三十八年ヨリ一百四十年前ニ当ル

寛文 明治二千年ヲ去ル一百三十九年ヨリ一百三十七年前ニ当ル

天和 明治二千年ヲ去ル一百五十五年ヨリ一百四十年前ニ当ル

元禄 明治二千年ヲ去ル一百九十五年ヨリ一百四十年前ニ当ル

寶永 明治二千年ヲ去ル一百八十八年ヨリ百九十四年前ニ当ル

正徳 明治二千年ヲ去ル一百八十三年ヨリ百八十七年前ニ当ル

漁夫ノ酒宴

八日前九時過萬舎ヲ出テ海水浴場ニ遊歩ノ途次北組ノ濱ヲ視ルニ平常ト異ナ

ツテ旗ヲ建テ列ス漁舟數隻砂上ニアリ之レ何事ナラント彼方へ赴キケルニ漁夫ノ一群

砂上ニ團座シテ酒宴中ナレバ傍ラノ堤ニ登テ其座状（圖ハ平面ノ位地ヲ表ス）ヲ描寫シ

テ現場ニ至リ状況ヲ観ルニ約子左ノ如キ現況ヲ示ス乃チ之ヲ逐次列記セシム

酒宴場ノ様タル波打際ノ砂上ニ漁舟一艘（三間許ヲ隔テ）並置セラレ各舟共艤ノ

方ニ矢倉様ノモノアリテ大旗ヲ建テ艤ノ方ニハ竿ニ白キ小旗ヲ結ヒ付ケ艤端ニ横ヘ

宴席ノ左右砂原ニ大ナル網ヲ擴ケ乾シ後方ニハ帆ヲ積ミ十シ其様ヤ恰モ天幕帳

舍ノ如ク之レ又タ一間ヲ隔ツ舟 天幕形ノ帆 及ヒ網ヲ似テ圍メル中央ハ宴席ニシ

テ筵ヲ敷キ列ラ子三万ニ漁夫列座シ一方ニハ舟主タルベキ商人三人濱手ヘ面シテ座

シスク環座セル宴席ニハ酒樽、德利、皿肴木盃等散置シ殊ニ舟主ノ面前ニハ目録ヲ載

セタル三万ヲ置キ今ヤ酒宴ノ最中ニテ娛樂ノ極点ニ近カランカ彼輩ノ拳動ニ於ケル

或ル者ハ杯ヲ手ニシテ鯨飲シ或ル者ハ醉イテ杯ヲ座前ニ置キ或ル者ハ肴ヲ喰ヒツ、或ル者

ハ喫烟シ或ル者ハ談笑ス漁夫等ハ斯ル「体タラク」ニテアリケルニ舟主ト思ハル者ハ頻リ二

狼藉ヲナシ恰モ演説ノ如ナレバ漁夫ハ之ヲ謹聽ノ態ナリシ此宴場ニ列スル人々ノ軀装

ヲ覧ルニ舟主ト思シキ者ハ各羣衆帽ヲ冠リ單衣ヲ着シ漁夫數十人ハ裸体ニシテ赤布ヲ

冠リ或ハ鉢巻ニシ腰辺ニハ黃赤又ハ白輝ヲ占メ跣足ナリ其座様ニ於ル舟主タルベキ

人ハ両足ヲ立テ膝ヲ抱ヘテ座シ漁夫ハ片足ヲ立テ、座シ或ハ「アグラ」ヲ組メリ此狀態

ヲ覧ア想ラク必スヤ故アルベクト信シ帰途南下ニ着物店ニテ力藏ニ遇フラ幸トシ彼

レニ濱方ニ於ケル酒宴ノ故ラ尋ヌニ左ノ答ヲ為セリ

上原力藏ノ直話

当地ニ方言「アグリ」ト称スル漁網ノ法アツテ「カツオ、マグロ等ラ沢山獲ルハ濱辺ニ

祭場ヲ設ケ舟主方舟子ヲ集メ酒ヲ捧ケテ舟主様ヲ祭り報謝ノ詞ヲ唱言シテ酒

宴ヲ開キ沖ヨリ獲ニ魚ヲ肴トナス、ナレド通例ハ野菜其他ノ食物ヲ用ヒテ祝酒ヲ飲

ミ宴訖テ「同拍手」（但シ三ツ打ナリ）拜札ノ式ヲ行フ尤モ祝宴ヲ催スルハ多獲ノ時ニ限

リ宴中舟主ヨリ舟子へ賞與ヲナス慣例ニシテ乃チ目録ニ添ルニ第一ハ赤色手拭第一ハ

赤色ニ三尺帶第三ハ赤色襷第四ハ高砂人形ノ服等ニシテ（但シ此賞ヲ与ルハ獲高ノ代

金ニ因ル）漁術ヲ勉勵セシムル為ナリ

此「アグリ」ト称スル漁法ハ沖ニ漕キ出テ地曳ノ如ク網ヲ海中ニ投シ水面ニ浮冰セル魚

ヲ漁スル仕法ニシテ乃チ一叟ノ舟ヨリ網ヲ入レ一叟ハ網ヲ次第ニ入レツ、円形ニ漕キ廻リ

一艘合シテ後ナ網ヲ舟中ニ引上ケ獲ル仕掛ナレバ單ニ水面ヲ引キ獲ルナリ斯業ヲ為ス

ハ通例四艘ヲ以テ組合ト定メ一組ハ一更ヨリ組成セラレ一叟ノ乗人ハ二十名ニシテ内一名ハ船頭（船長ノ號也）ナレバ舟子ハ十九人ナリ故ニ一組ノ人員ヲ四十名ト定ム

（図省略）

力藏トノ問答ヲ了リ十一時過帰舍

高麗村視察

正左過八木姓三郎ト供ニ高麗村ニ赴キタル顛末ヲ左ニ記ス

八木氏同伴ニテ寓舎ヲ出テ鉄道ニ添ヒ畠道ヲ行クニ彼方是方ノ畠地ニ祝部土器ノ

破片散布スルヲ観ル本海道ニ出テ小字ケハイ坂ニ至レバ右側ノ畠地ニ古塚アリ行テ

其周辺ヲ搜カスニ遺物ヲ認メズ高麗村ニ至リ農家ニ憩ヒ唐ヶ原ハ何處ニアルゾト

尋ヌニ老翁手指シテ曰ク我力家ヨリ正面ニ見ユ畠地ハ唐ヶ原ニシテ昔シ唐人居タ

リシト傳ヘリ次ニ高麗氏（高麗神社ノ祠官）ヲ訪ヒ古異物一覽ヲ乞フニ所持セストノ

事ナレバ次ニ小嶋仙之助ヲ訪ヒ古異物一覽ヲ頼ミケレバ仙之助王シ棚内ヨリ祝部

土器曲玉ヲ携ヘ出シ我等ノ面前ニ陳列セシム之ニ於テ八木氏ハ出所ヲ聞テ後チ其

実形ヲ圖寫ス（此出所トハ横穴ニシテ高麗山ノ南麓ナリ）對話訖テ小嶋氏ニ所持セストノ

レ其出所ニ至リ横穴ヲ見ルニ山ノ中腹ニシテ三四口アレド入口ハ皆ナ雜木ヲ以テ蔽

ハル辛シテ穴内ニ入り構造ヲ窺フニ大磯ノモノト同シ造リ方ナリ畠道ニ戻リ

小嶋氏ニ別レ「ケハイ坂」西方ノ猫塚ニ至リ視ルニ塚側ノ畠地ニ祝部破片ト埴

輪破片アリタレバ八木氏ハ其數片ヲ拾得ス之ヨリ帰途ニ向ヒ停車場前ニテ

同氏ニ別レ帰舍

本日小嶋氏ニ「ミガキ」石使用ノ有無ヲ尋ヌニ同氏曰ク当村及ヒ近郷ハ一般ニ

談石ヲ用ヒ俗ニ「ハチノスイシ」ト称ス云々

夜ニ入リ熊坂氏來テ左ノ土俗談ヲナス

当地ニテ祠前ヘ田石ヲ奉納スルハ人々ノ信心ヨリシ尤モ談石ハ石工ニ注文シテ造フシ

メ頂ト底ハ少シク四マシアリ之レ据方ニ適スル様ニ為タルモノニテ其側面ニ奉納

ト云ヘル文字ヲ刻セルト文字ナキノ一種アリ

「サイトバラ井」并ニ「ヤン・コツコ」ノ事

大磯町ニテハ毎歳正月十四日ニ神祭ヲ行フテ注連飾ヲ焼クアリ尤モ此式ヲ為

スニ住民ニ派ニ分ルレバ自ヅカラ式典ヲ別ニセシム

農民ハ道陸神ニ酒及ヒ種々ノ供物ヲ捧ゲテ祭典ヲ行ヒ後チ各戸ヨリ注連飾ヲ

持子來テ神前ニ積ミ日没ヨリ火ヲ付ケ焼失セシム之ヲ方言「サイトバラ井」ト称ス

漁民ハ裸体ニテ神輿ヲ「カツギ」海中ニ入り暫クシテ陸上ニ「カツギ」揚ケ祭典ヲ行フ

古墳所在地

本日往復ノ車窓ヨリ眺ムルニ大磯國府津當ハ約子立坦ノ岡ニシテ古墳散在シ特ニ

多存ノ地ハ國府本郷附近ナリ

本日松田山北一村ニテ覽タル臺石（第九圖第十圖）及ヒ鶴巣（第十一圖）ノ略圖ヲ左ニ描寫ス

（図省略）

小磯村之上俗視察

八月七日正午寓舍ヲ出テ大磯地内鳴立沢□□□□ヲ過キ台町ノ西端ニ至レバ

右側農家ノ軒下ニ円石一個アリ倚テ詫家ニ入り主人ト問答スル左ノ如ク

問 此石ハ何ンナルヤ

答 神様へ奉納ノ石ナリ

問 此石ハ素ヨリ頂ヲ凹メルヤ

答 素ヨリナリ

問 茅中子供戸外ニ居リシカ何ニ思ヒケン詫石ニ寄リテ頬リニ頂へ砂ヲ盛リ遊ブ予戸外

ニ出テ子供ノ遊ビラ止メ詫石ヲ孰視スレバ圖ノ如キ形状ニシテ石世期遺物ノ凹石ニ類

似ノ点アレバ底裏ハ奈何ント詫石ヲ手ニテ「オコシ」見レバ頂ト同シク凹メアリ之ヲ得ン

ト欲シ傍観ノ村人ニ持主ヲ尋子ハ町内共ノ奉納ナレバ讓り難シト答フ、松並木ヲ過

キ西小磯村ノ東端ニ至レバ右側農家ノ庭ニ圖ノ如キモノ立ラル之ヲ見テ村ノ中央左

側ノ農家ニ休ヒ立物ノ故ヲ尋ヌ老婆ノ苔左ノ如シ

当村ニテ新佛（新葬ノ亡者ヲ指ス）アルハハ新ヒ益ヨリ二回忌ノ益迄テ彼ノ立物ニ燈

籠ヲ「ツルシ」供養トナス

此家ヲ出テ西歩シテ鎮守社ノ前ヲ過キ行クニ左側ノ農家ニ老夫婦涼ミ居レバ彼レ

ニ付キ問答セバ聊カ土俗ヲ窺フヲ得ヘクト信シ詫家ニ入テ一礼シ老翁ト問答スル羽左ノ

如ク

問 此辺ニテ長細キ石ヲ「オモリ」ニ使フヤ

答 其品ハ俵ヲ編ムモノニテ我家ニアリ

之ニ於テ翁物置所ヨリ持來テ予カ面前ノ土間ニ置キ左ノ苔ヲナス

答 此石ハ海濱ヨリ搜シ來ルモノナレバ容易ニ得難シ

馬ノ「タツ」及ヒ草履ヲ磨クニ円石ヲ用ユルヤ
當村ニテモ詫石ヲ使ヘドモ所有セス
磨石ハ何處ヨリ得ルヤ

問 其右ヲ一覽イタシタシ

答 其品ハ俵ヲ編ムモノニテ我家ニアリ

當村ニテモ詫石ヲ使ヘドモ所有セス

之レ又タ海濱ヨリ拾ヒ來ル 当村ニテ食事回数時刻、常食物及ヒ間食ノ種類ハ奈何ナルヤ

朝晩夕ノ三回ニシテ朝ハ七時、晩ハ十一時、夕ハ八時、常食ハ粟米ノ混炊飯ニシ

テ一升ニ付米一合半割麦又ハ粟八合ヲ混ズ其献立ハ左ノ通

朝（飯、香物）晩（飯、汁）夕（飯、汁）

間食ハ農事繁忙ノ際ニ限レバ期節ニ従ヒ食品ヲ異ニス村人俗ニ「茶ヲケ」ト唱

ヘ餅、フカシイモ（薩摩芋）、イモダンゴ（サツマイモヲ輪切ニシテ乾タルモノ）等ナリ

磨キ石及ビ「オモリ」石ヲ讓受タシ

「オモリ」石一個ヲ進呈スベシ（圖ノ如シ）

紀念ノ為メ足下并ニ磨石所有主ノ姓名ヲ聞カシ

之ニ於テ老翁ヨリ「オモリ」石ヲ得タレド磨キ石ヲ所望セバ彼レ隣家ヘ赴キ詫石ヲ持參シタ

レバ彼ヲシテ所有主ニ讓受ヲ掛合メシニ進呈ノ由ヲ返報ス倚テ詫石ヲ得タリ（圖ノ如シ）

紀念ノ為メ足下并ニ磨石所有主ハ中川甚七ト申ス

問 尚此他ニモ神佛等ヘ石ヲ供フアリヤ

答 当村ニテハ各自ノ宅地内ニ稱何ヲ祭リ予カ宅地ニモ小祠ヲ安置シ石塊ヲ供フ

之ニ倚テ小祠ヲ拝シ詫石ヲ覽ント欲シ老翁ニ導カレ裏地ニ至レバ大樹ノ下ニ小祠アツテ石ヲ

履前ニ供ヘアリ（圖ノ如シ）

問 此石ハ何ント称シ人丁ヲ加タルモノナルヤ

答 俗ニ「ゴリン石」ト云ヒ海濱ヨリ拾ヒ來ルモノナレバ敢テ人丁ヲ加ヘズ

此言ヲ聞キ謂フク俚俗「ゴリンシ」ト唱フルハ所謂五輪石ノ轉訛ナレバ之レ五輪塔立石ノ海濱

ニ流レ來ルモノナラント想ハル數回ノ問答を終テ渡邊方ヲ去リ再ヒ台ニ至リ過刻観タル

円石ノ故ヲ詳カニ聞ント欲シ先ニ訪問セシ農家ノ裏方ニ赴ケバ石塊ヲ積ミ上ケタル頂ニ異

様ノ石碑立チ其周辺ニハ數個ノ円石羅列シアリ抑モ此碑ハ如何ナルモノカト側ノ麦藁製造

所ニ入テ壯夫ニ質問スル左ノ如ク

問 此碑ハ何ンナルヤ

答 舍側ニ安置ノ碑ハ町内ノ墓ノ神ニシテ町民ノ崇敬厚シ

問 羅列ノ円石ハ何ノ為ナルヤ

答 此石ハ町民ノ奉納物ナリ

問 茅訖テ午後三時寓舍ニ帰ル（蓋シ此行ハ小磯村土俗ノ一部ヲ觀察ンタリ）

本日視タルモノ并ニ讓受ノモノヲ左ニ描寫セシム

種々ノ神符ヲ軒口并ニ神棚ニ奉安シ罹病ノ際ハ医薬ヲ用ヅシテ之レニ換ルニ神官（俗ニ云フ山伏ナリ）ノ說ヲ確信シテ祈禱祓除等ヲ受ケルナリ

松田山北地方視察

六日晴午前十時十分大磯停車場ヲ發車シテ松田ニ向ヒ十一時松田ニ下車シテ停車場ヲ出テ村道ニ至レバ左右ヘ通スル街路ニシテ所謂足柄路ナレバ左ハ関本ニ通シ右ハ秦野ニ向フ右折東行村内ヲ一覽セバ左側ニ寺院アツテ山門脇ニ圖（第一圖）ノ如キ石祠アリ之ヲ描寫シテ寺院脇ノ旅亭ニ休ヒ晝飯ヲ喫シ後子主人トノ問答左ノ通

足下ノ姓名ハ

唇弓ヲ柏屋ト称シ姓名ハ高橋六郎丘衛

隣地ニアル寺院ハ何ント号スルヤ

延命寺

山門脇ノ石祠ハ何神ヲ祭リシヤ

彼ノ石祠ハ村民ノ尊信スル神ニシテ塞ノ神ナリ

当村地内ニ瓦片ノ出ル處アリヤ

村内字「ソシ」ト云ヘル地ヨリ瓦ト燒米ノ出ヅルアリ此處ハ往時松田某ノ城趾

ニシテ村人俗ニ「チャウヤマ」（城山）ト称ス

川狩ニ毒流ヲアヌアリヤ

川狩ニ「タデ。イヌタデ。タバコクキ等ヲ用ヒ駿河府中辺ニテハ「サンショ皮。灰

等ヲ使シガ万今ハ禁ゼラル

高橋氏トノ對話ヲ終テ秦野道ヲ東歩シ小流ノ土橋ヲ渡テ右側ノ農家ニ入り老

婆ニ逢フテ運搬貞ヲ一覽シ其用法ヲ聞知シタレバ其略圖（自第圖迄第六圖）ヲ描寫

シ次ニ屋内ヲ覽レバ土間ノ一隅ニ妻女安座シテ草履ヲ作り其側ラニ三三個ノ凹石アリタ

レバ問答ヲ為ス左ノ通

當村ニテハ「ワラヂ」ヲ磨スルニ用ユ

婆ニ逢フテ運搬貞ヲ一覽シ其用法ヲ聞知シタレバ其略圖（自第圖迄第六圖）ヲ描寫

テ停車場ヘノ帰途右側ノ農家ニ入り屋内ヲ覽ルニ例ノ凹石ト「ナマコ」形ノ石アレバ當家

ノ主婦ニ質問スル左ノ如ク

此凹石ハ一般ニ使フルヤ

農家ニテ一般ニ使用ス

「ナマコ形」ノ石ハ何ニ用ユルヤ

荅　此石ハ席又ハ俵ヲ編ムニ使フ「フンドン」ナリ
是等ノ石ハ何處ヨリ持チ来ルヤ

問　酒匂ノ河原ヨリ拾ヒ来テ使フナリ
荅　酒匂ノ河原ヨリ拾ヒ来テ使フナリ

此家ヲ去テ停車場前ノ茶屋ニ休フ爰ニ調査シタル運搬具及ヒ石器（第七圖第八圖）并ニ石祠等ノ略圖ヲ左ニ載セ参考ノ料ニ備フ

（國省略）
午後一時四十五分松田ヲ發車シ一時山北ニ下車シテ停車場西方ノ農家ニ至リ老翁ニ逢フテ問答シ得タル要件左ノ如シ

荅　當村ニテ火手皿ヲ使用スルヤ

問　數年前迄ハ用シガ現今ハ廢セリ

荅　所有ノ「スバ竹」ハ何ニ使フヤ

問　筭及ヒ行李ヲ造ル料トナス

荅　此家ヲ去テ停車場北方ノ農家ニ赴キ主人ト問答スル左ノ如ク

荅　所有ノ「スバ竹」ハ何ニ使フヤ

荅　「スバ竹」ノ実ヲ食物ニ代用スルアリヤ

荅　當村ニテハ「スバ竹」ヲ採リテ製造用ニ供スレド其実ヲ食セズ

荅　當郡ノ僻村タル世附中川神縄ノ村况ハ奈何ナルヤ

荅　小田原人ハ僻遠未開ノ様ニ噂スレド當時ハ開ケテ往時ノ村俗ヲ失ヘリ

（當家及ヒ先ニ訪問ノ農家ニモ例ノ凹石アリシ）此家ヲ去テ停車場脇ノ農家ニ至リ

砥石袋藁草履等ヲ買受ケ停車場ニ返リ四時山北ヲ發車シ同五十分大磯ニ下

車シテ寓舍ニ帰ル

本日視察セシ松田山山北ノ村俗及ヒ豫察ノ遺跡ヲ左ニ逐録セシム

松田山北ニ村民ノ屋舍ハ約子萱葺ニシテ棟上ニ風防ノ為メ「シヤガ草」ヲ植ヘ特ニ農民

ノ住屋内構造ニ於ル其半部ハ床板張ノ住室ニシテ其半部ハ土間ニテ物置場トシ

「ユルリ」ハ住室ノ一隅ニ設ケラレ自在鍵ヲ垂下シ之ニ鍋ヲ懸ケ炊所トシ土間ノ天井ニハ家

鶏ノ「ツリ巣」ヲ設ケ土間ニハ自然石ヲ据ヘテ藁打台トス母屋ヲ離レテ物置舍アリ之ハ宮城野邊ノモノト構造ヲ均フシ厩モ又タ離レテ建ラレ掘立柱ノ萱葺ニテニ方ハ

「ツブシ竹」ヲ以テ壁ニ換ヘ正面ハ丸太一本ヲ横タヘ馬ノ逸出ヲ防ク床ハ土間ニシテ

青草ヲ敷キ食料兼藁草ニ充タス特書スベキハ現時石器ヲ使用ノ件ナリ

石世期ノ遺跡

本日往返ノ車窓ヨリ豫察スルニ曾我村切削附近ノ梅林ハ赤粘土ノ岡ナレバ其遺物ヲ含藏スペクト想ハレ又タ松田對岸ノ岡モ同シ地勢ヲ表ス

テ之ヲ製作スルハ魚皮ヲ小刀ニテ薄ク剥キ指ニテ引キ延バシ半日程塙水ニ浸シ後子
ニツ割ノ竹ニ張リ日光ニ晒シ乾シ上ケテ第四圖ノ如キ心臓形ニ切りテ縫ヒ合スナリ

〈図省略〉

「ハエナワ」ノ碇

「ハエナワ」トハ長サ數十ヒロノ麻繩ニ若干ノ鉤ヲ付ケタルモノニテ繩ノ末ニ圖（第

五圖）ノ如キ碇ヲ結ヒ付ケ海中ニ流沈シムルヤ魚菜テ喰フ仕掛ナリ此碇ハ削竹

ヲ鉤柄ノ如ク造リテ石ヲ麻糸ニテ縛レルナリ

「イカヅノ」

此品ハ圖（第六圖）ノ如ク木ヲ削リテ魚形ニ造リ口ノ部分ニ孔ヲ明ケテ鼻ニ似セ

「テグス」ヲ通シ其末ヲ輪ニ結ヒ手繩ヲ結ヒ付タル為ニシ眼ハ赤サンゴ玉ヲ糸

ニテ留メ腹部ニ鉛子ヲ打込ミ「オモリ」トシ左右ノ脇腹ニ鳥ノ羽毛ヲ挿シ

ミ比札ニ偽セ尾ノ部分ハ針金ヲ數本打チ込ミ其末ヲ曲ケテ鉤トシ中間ハ

麻糸ニテ巻ケリ

〈図省略〉

「イカヅノ」

一 章魚釣具

一 バカヅナ用ヒラメ皮

一 ハイナワノ碇

一 オモリ

ト答フ熟ラ此石ヲ覧ルニ其石質ト云ヒ其形ト云ヒ余力屢バ貝塚ヨリ拾ヒシ石器ニ類似ノ点
アレバ漁夫ニ乞ヒ譲文ク圖（第三圖）ノ如シ

〈図省略〉

一日午後尾崎吉五郎ヲ訪ビ再質問ヲナシ聞キ得タル件左ノ如シ

尾崎吉五郎述べ曰ク当地ニ吾カ如キ鮑採業ヲ營メル者數十人アリ斯業ヲ

為スニハ左ノ道具ヲ要ズ

一 小舟ハ方言タブ子ト称シ長サ九尺許リ巾三尺餘リ（形状前二出ス）

一 小舟ヲ漕クニ六七尺位ノ「ろ」一挺

一 碇ハ圖ノ如キモノニテ木ヲ以テ鉤ノ柄ノ如ク作り柄ノ中程ニ石ヲ繩ニテ縛リ「オモリ」

トシ柄ノ一端ニ繩ヲ結ヒテ「ワソカ」トシ之ニ数ヒロノ繩ヲ付ケ繩ノ一端ヲ舟縁ニ縛リ

置キ海中ニ投シ舟ノ浮動ヲ止メシム

一 浮ケ（一名浮木）ハ必用ノ要具ニシテ其製作タル丸太ヲ四尺許ニ切り圖（前二出ツ）

ノ如ク「一所ニ「ホゾ」ヲ穿子之ニ太繩ヲ通シテ縛リ付ケ繩ハ丈ケ三尺位ニテ其末ニハ

圖（前二出ツ）ノ如キ丸石ヲ結ヒ付ケ「オモリ」トス此具ノ用ハ鮑採中息ヲ叶ザル「ナレ

バ半時間位ニハ必ス水面ニ浮ヒ出テ「浮ケ」ニ抱キ付テ息フ「ナルヨリ俗ニ「イキツキウ

ケ」ト称ス尤モ此具ヲ投スル位地ハ鮑ノ居處ニシテ「オモリ」石ハ海底ニ沈ミ丸太ハ水

面ニ浮カビニ物ヲ連結セル繩ニ依リテ浮ヒ出ツルナリ充分息ヲ吸フテ再ヒ海中ニ泳

キ入ル故ニ斯具ナケレバ鮑業ヲ營ム能ハズ

一方言「カ子ベラ」ハ就中重用ノ品ニシテ鮑ヲ岩面ヨリ「ヘガス」ニ使フ尤モ此具ハ圖

ノ如キモノニテ柄ハ木ニシテ「ヘラ」ハ鉄ナリ但シ方言「ヘゲス」ハ「ヘガス」ヲ云フ

一 網袋ハ麻又ハ藁及ビ「シユロ」繩等ニテ編ミタルモノニシテ鮑ヲ入ル、ニ用ユ

一 鮑採業ヲ為スニハ裸体ニ種ヲ占メ下腹ニ網袋ヲ縛リ付ケ手ニ「ヘラ」ヲ持ナテ潛

水ノ「ナレド近來ハ眼金ヲ掛クルナリ」ハ「眼」ヲ傷フノ説起リテヨリノ「ナリ

順次體寫シテ左表ノ如キモノヲ得タリ是等ハ皆ナ舟主ノ記標ナルベシ

（図省略）

以上ノ諸件ヲ調査シテ十一時寓舍ニ帰リ午後海濱ニ赴キ取調ノ件ハ左ノ如ク

一 海沿場附近ノ砂上ニ小舟アレバ漁夫ニ用途ヲ尋ヌニ此舟ハ方言「タブ子」ト称シ鮑採

集ノ際用ユル舟ナリト苔フ圖（第一圖）ノ如ク次ニ傍ヲ覽ルニ丸太ニ大繩ヲ以テ結ヒ付

タル石アリ此品ハ何用ニ使フヤト漁夫ニ尋子バ之ハ鮑採ノ刻水面ニ浮ヘル具ナリ

ト苔フ又タ問ヒ曰ク此石ハ何處ニ得テ原形ノ儘カ又ハ作工ヲ施セルモノナルカト尋ヌ

ニ漁夫曰ク海濱ニ拾ヒ後子繩ノ「クビリ」目ノ部分ダケ道具ヲ以テ「クビラシ」タルナリ

四日熊坂氏來訪ニ付キ聞知ノ件左ノ通

同氏曰ク漁民ハ信向心深キヨリ宅地内ニ小祠ヲ鎮座シテ朝夕拜札ヲ怠ラズ其

祭神ハ稻荷及ヒ海神（俗ニ龍宮又ハ舟玉ト称ス）ニシテ平素祈禱祓除ヲ好ミ

リ（圖ノ如ク）懷ニ納メ石階ヲ登テ神殿ヲ拝スルニ正面ニ御嶽神社ト書セル扁額ヲ掲

ケラル偶マ扉ヲ覽ルニ「松カサ」ヲ糸ニテク、リ數十個ヲ連結シテ格子ニ懸ラルハ祈

ノ為ナラム參拝ノ後チ社地ヲ去リ吉松病院前ノ烟道ニ至レバ農夫ニ逢フ仍チ「松カサ」

苦笑ス之ヨリ烟道ヲ西歩シ小流ヲ渡テ小磯ノ烟ニ達シ尙ホ西行セバ夏作物繁リテ

土器破片ノ散布ヲ見付ケ難シ更ニ烟中ヲ歩テ西南ノ方數十間行ケバ烟中ニ塚アリ

其構造ヲ視ルニ稍々完全ノ形チヲ存レド周圍ハ耕耘ノ為ノ鋤崩セラレ内部ノ物質ヲ

露出セシム此塚ハ高サ五尺許ニテ縱横ノ直徑七尺許凹塚ニシテ形チ圖ノ如ク其積層

ヲ驗スルニ表面ハ土ヲ盛被スレド内部ハ小石ヲ以テ積上タレバ所謂石塚ナリ又タ近傍ニ

「三ノ塚アリ是等ノ塚ヲ視テ作物刈上ノ烟ニ至レバ細末ニ碎カレシ土器破片ノ散布

スルヲ認ム之ヲ拾ヒ驗スレバ祝部十器ノ破片ニシテ一種アリ乃チ「ツハ浅口色、ツハ赤色」

リ是ヨリ東方ヘ赴クニ畦道及ヒ畠地ニハ夥多ノ土器片散布ス小字「オホシユウガイ」ノ

畠ニ至リ耕耘ノ農夫ニ逢フテ小磯村民ノ食事回数并ニ常食物ヲ尋ヌニ左ノ答ヲ得タ

リ「食事回数「朝ハ六時」「晝ハ十一時」「夕ハ七時」又夕間食ハ午後二時ニ食フ、常飯

ハ混炊飯ニシテ白米五合ト引割麦ノ五合ヲ合セテ「升ニ充ス以上ノ如ク視察終テ寓舍

ニ帰ル

（國省略）

八月一日午前南下町尾崎磯五郎（人呼テ異名ヲ「ミヂン」ト称ス）ヲ訪ヒ漁具ヲ譲アリ左

ノ品々ナリ乃チ「キス魚釣具、ムツ魚釣オモリ石」

（國省略）

「キス」魚ヲ釣ルハ奈何ニスルヤ

苔「キス」魚ヲ釣ルハ數十ヒロノ手繩ヲ付ケ海中ニ垂レ手釣ニシテ蛎肉ヲ餌トス

問「ムツ」釣リオモリ石、キス釣リ「オモリ石」ヲ麻糸ニテ縛ルニ法アリヤ

苔惣テ「オモリ石」及ヒ釣糸等ヲ麻糸ニテ縛ルニ一定ノ秘術アリ

斯ク磯五郎ト對話ノ刻壯夫側ニテ話柄ヲ聽キ居ルニ付キ同人ニ對シ問答スル左ノ如ク

問出帆帰帆ノ時刻ハ奈何ナルヤ

苔当濱ニテハ一番鶏（鶏鳴ヲ云フ）ニ起床シテ出漁ノ用意ニ掛リ一番鳥ニ舟ヲ出シ

夕刻帰帆ノ定ナレド漁獲ノ多寡ニヨリ夜半ニ迄ニテ帰帆スルアリ

苔海上ニテ篝火ヲ焚スル奈何ナル器ヲ用ユルヤ

苔夜中海上ニテ篝火ヲ焚スルニハ鉄ノ「サデ」（圖ノ如シ）ヲ舟ナバタニ挿シ薪ヲ積ミテ火

ト

ヲ点ゼシム

問海上漁時ノ着服ハ奈何ナルヤ

苔春ヨリ秋迄テハ裸体ニシテ褲ヲ占メ冬ハ短衣又ハ腰袋ヲ着ス

尾崎方ヲ出テ北下町ヲ過ルニ漁家ノ入口ニ種々ノ祈禱物アリ乃チ

或ル家ノ鴨居ニハ「サモヂ」ヲ針付ニシ其表面ニ文字ヲ記入セシム

則チ上端ニ百日積一切無用下端ニハ本人ノ生年月何ノ誰トアリ

又タ或ル家ノ軒ニ蜻蛉草ヲツルスアリ或ル家ノ入口十間ニ幣束ヲ

建テリ是等ヲ覽テ長者町（俗ニ新地）ニ至リ漁夫力藏ノ宅

ヲ訪フニ不在ナレバ上原金次郎ヲ訪ヒ漁具ヲ覽テ説明ヲ聽キ次

ニ珍寄ノ漁具數品ヲ譲アタリ左ニ其品目ヲ掲ケ注ニ説明ヲ

記入シ附ルニ漁具ノ略圖ヲ加ヘ説明ノ足ラザルヲ補フ

（國省略）

章魚釣針

此品ハ第一圖ノ如ク薄板ヲ削リ表面ニ円石ヲ麻糸ニテ縛リ付ケ「オモリ」トシ裏面ニ

鉄線ヲ曲タル鉤ヲ麻糸ニテ結ビ付ケ上端ニ糸ヲ縛リ之ニ數十ヒロノ手繩ヲ付ケ餌

ニハ「ホラボ」魚ヲ用ユ

オヅメ磨具

此品ハ第三圖ノ如クモノニシテ「オヅメ」ヲ磨クニ用ユ之ハ方言「マコライザメ」ト称スル

魚ソ皮ニシテ其剥製法ハ生魚ノ頭ヲ切落シ次ニ皮ヲ尾ノ方ヘ生剥シ骨及ヒ肉ヲ

除キテ後チ剥皮ヲ清水ニテ洗ヒ上ケ適宜ニ藁ヲ束子之ヲ「シン」トシテ剥皮ヲ被ラシム

（國省略）

角鉤

此品ハ第三圖ノ如ク鹿角ヲ筒形ニ削レルモノニシテ上端ノ切口ヨリ側面ノ上部ヘ孔ヲ

貫キ之ニ四五尺ノ麻糸ヲ通シ一尺許ノ間ハ銅線ヲ巻ケルハ魚ノ喰ヒ切ラザル為

メ下端ノ切口中央ニ針金ヲ挿シ其末ヲ曲テ釣ニ充タシ之ヲ被フニ細ク短冊形ニ切り

タル魚皮數十枚ヲ以テス（此皮ハフグノ皮ナリ）之ニテ釣レル魚ハマグロ。ブリ。サワラ。

メジ等ナリ

鉤ヲ作ルニ用ユ骨ノ種類

偽鉤ヲ作ル骨ニ別アリ乃チ獸類ニテハ鹿角、牛角、馬爪魚類ニテハ鯨、マルタ等ノ骨ナリ

「バカヅナ」ニ用ユ魚皮ノ種類及ヒ製法

「バカヅナ」ニ用ユル魚類ハ「マビラメ」「ガングラヒラメ」「赤目フグ」「コチ」「目赤フグ」等ニシ

切ニナシ外皮ヲ剥ギテ磨キ上ヶ腹部ニ鉄線ノ足（三寸位ノモノ）一本ヲ付ケシ
モノテ漁時ニ臨ミ舟ニ端ニ足ヲ打込釣糸ヲ懸ケ置キ「タグル」ヲ速助セシム所
謂漁車ノ代用物ニシテ之レナキハ深底ヨリ釣リ上ル難シ

（凶省略）

偽像漁具

方言「バカヅナ」ハ第五圖ノ如ク小鰯ヲ像ドルモノニテ頭部ハ鉛ヲ用ヒ眼球ハ糸
ノ結ヒ目ニシテ其末ヲ口ヨリ吐キ出サシムルハ手繩ヲ付ル為ナリ体ハ魚皮ヲ以テ
袋ノ如ク縫ヒ（細糸）合セ鉤ハ頭部ヨリ袋ノ内側ヲ潛リテ腹部ニ突キ出タリ但
シ魚皮ハ「フグ」ノ皮ナリ

方言「イカヅノ」ハ第六圖ノ如ク烏賊ヲ像ドルモノニテ全身ハ鹿角ニテ作り眼ハ
糸糸ノ結ヒ目ニシテ鼻ヨリ其末ヲ出サシメ之ニ手繩ヲ付タルナリ体ノ下部
ニ數本ノ針金ヲ挿シ込ミタルヲ麻ニテカラゲ其末ヲ曲ゲテ鉤トスルハ烏賊ノ手
足ニ形ドルナリ

方言「バヅメ」（馬爪）ハ第七圖ノ如ク大鰯ヲ像トルモノニテ体ハ馬ノ爪ヲ削リテ作
リ上端ノ切口ヨリ側面ニ孔ヲ明ケ三尺位ノ麻糸ヲ通セルハ竿ニ結フ為メニシテ
体ノ底ニ針金ヲ挿シ込ミ之ヲ蔽被スルニ烏毛ヲ似テス

用法

是等ノ偽像鉤ハ松魚ヲ釣ル用具ニシテ其仕法タル鉤ノ口糸ニ長サニヒロ位ノ
麻糸ヲ付ケ其末ヲ間半乃至三間位ノ竿ニ結ヒ付ケ之ヲ携へ漁夫海上ニテ
松魚ノ浮冰ヲ認ムルヤ舟ヲ遭キ寄セ鉤（鉤）ヲ投シ其争ヒ喰フヲ度トシテ偽像ノ
鉤ヲ投下シ竿ニテカキマワスヤ詫魚ハ偽餌ト本餌ヲ辨マエズ喰フヤ釣ラル、ナリ

南下町酒屋ニテ漁夫力藏トノ問荅左ノ如ク

海濱ニアル丸太ノ井桁ハ何ニ用ユルヤ

夫ハ方言「スラ」ト称シ舟ヲ海上ニ降スキ又夕海上ヨリ揚クルは砂上ニ据ヘ其上舟
ヲ載セ近ラシ搬ブ具ニシテ漁車ノ代用ヲナス此ハ圖（第一圖）ノ如ク井字形ニ丸

太ヲ組ミ合セタルモノニテ縫ノ一本ハ松ヲ用ヒ横ハ方言「サルタ」ト称ス木ヲ使フ此木

ハ函根山中ヨリ切出セルモノニテ當地ニテ「サルタ」ト称ス乃チ「サルスベリ」ナリ

當地ニテ漁民初釣魚ヲ神社ニ納ムルアリヤ

漁民沖ニテ獲シ初釣魚ヲ帰帆後高麗神社ノ社壇ヘ奉納セシム尤モ一艘ニ付一

尾ヲ限ル但シ小魚ハ全身ノ儘ヲ圖（第二圖）ノ如ク口ヨリ「アギ」ヘ繩ヲ貫キ、大魚ハ

運搬ニ不使ナレバ口中ニアル方言「ホシ」ト称スル部分ヲ切りテ棒グ（此「ホシ」ト云ヘルハ魚ノ

荅問

海濱ニアル丸太ノ井桁ハ何ニ用ユルヤ

夫ハ方言「スラ」ト称シ舟ヲ海上ニ降スキ又夕海上ヨリ揚クルは砂上ニ据ヘ其上舟
ヲ載セ近ラシ搬ブ具ニシテ漁車ノ代用ヲナス此ハ圖（第一圖）ノ如ク井字形ニ丸

太ヲ組ミ合セタルモノニテ縫ノ一本ハ松ヲ用ヒ横ハ方言「サルタ」ト称ス木ヲ使フ此木

ハ函根山中ヨリ切出セルモノニテ當地ニテ「サルタ」ト称ス乃チ「サルスベリ」ナリ

當地ニテ漁民初釣魚ヲ神社ニ納ムルアリヤ

漁民沖ニテ獲シ初釣魚ヲ帰帆後高麗神社ノ社壇ヘ奉納セシム尤モ一艘ニ付一

尾ヲ限ル但シ小魚ハ全身ノ儘ヲ圖（第二圖）ノ如ク口ヨリ「アギ」ヘ繩ヲ貫キ、大魚ハ

運搬ニ不使ナレバ口中ニアル方言「ホシ」ト称スル部分ヲ切りテ棒グ（此「ホシ」ト云ヘルハ魚ノ

心臓ナリ

魚ヲ神前へ供フルキ唱言アレバ大意ヲ演アリタシ

唱言ノ大意ヲ述レバ「斯ル良魚ヲ授ケ玉フヲ難有存ジマス此後チモ沢山ニ大魚アラ
ン様折リマス」

当濱ニテ使フ「モリ」ハ奈何ナル製作ニシテ漁時ハ奈何ニ投下シ之ヲ以テ獲スル魚
ノ種類ハ何魚ナルヤ

当濱ニテ用ユ「モリ」ノ製作ニ於ル柄ハ櫻ノ木ニテ丈ケ三ヒロ位ヲ普通トシ其両端ハ
尖リテ漁時ニハ一端ニ鉄ノ矢尻ヲ付ク之ニ手繩ヲ結ヒ柄ニカラゲ其餘ハ巻キ置

クモノニテ此繩ハ麻ヲ撚リシモノニシテ長サ三百五十ヒロ位アリ全体ノ形ハ圖ニ
示スガ如ク（第三圖）此器械ヲ海上ニテ使フ方法タル先ソ魚ノ浮冰ヲ認ルヤ舟
ヲ漕ギ寄セ五六度合トシテ投スルモノナレド魚ノ種類ニ従ヒ或ハ前面ヨリ

シ或ハ側面ヨリシ又ハ尾ノ方ヨリス尤モ「モリ」ヲ投スル人ハ舟ノ舳ニ立チ左足ヲ踏張
リ右足ニテ、ヲ支ヘ恰モ鎗ヲ操スル身構ニシテ右手ニテ「モリ」ノ下端ヲツカミ左手
ニテ柄ノ中程ヲ握リ頭上ニ棒ゲ下端ヲ高フシテ矢先ヲ少ク下ケ度合ヲ測リテ投

ズ此械ニテ獲ル魚ハ「マグロ」「サワラ」「カ子ウチ」（シモクザメ）等ナリ

釣針所有ナレバ譲タシ

容易ノナレバ進至セント答ヘ懷ヨリ數個ヲ出シ授ク（馬爪一、バカヅナ一）

（凶省略）

「モリ」并ニ釣針ハ何者ノ作ナリヤ

荅問
「モリ」ノ柄ハ棒屋ノ作ニシテ矢先ハ鍛冶工ノ作ナリ釣針ノ種類ハ多ケレド皆ナ漁夫
ノ自作タリ

次ニ南下町屋崎磯五郎トノ問荅左ノ如ク

問常食物割合ハ奈何

荅吾輩ハ一日三回ノ食事ニシテ「朝ハ飯、汁」「晝ハ飯、肴、野菜」「夕ハ飯、汁、肴物」當飯
割合ハ白米六合引割麦四合ノ割合ナリ

平日魚ハ奈何ニシテ獲ルヤ

荅此魚ヲ獲ルニハ方言「ハヒナワ」ト称スル數十ヒロノ麻縄ニ鉤ヲ付ケ「ドヂヤウ」ヲ餌
トシ「オモリ」石ヲ付テ海ニ流シ釣ルナリ

小磯地内視察

三十一日午後廻舍ヲ出テ大磯西隅松本別荘前ヲ過レバ右傍山麓ニ神社アリ參拝

セント表鳥居ノ礎ニ近ケバ地上ニ石アリ形子凹石ニ似タレバ之ヲ拾ヒ驗スルニ眞物ナルニヨ

明治三十年七月二十八日ヨリ八月三十日マデ大磯町ニ滞在中同地及ビ附近ニ於テ取調タル件ヲ左ニ集録セシム

七月二十八日熊坂鎌太郎トノ問答左ノ通

近傍ニ塚アルヤ

答 大磯地内字戰場平（俗ニ「センヂヤウジキ」ト云）ニ塚アリ其他諸処ニアリ

問 先年百足屋ニテ横穴ヨリ出タル土器ヲ覽シガ今ニ保存スルヤ

答 百足屋ニテハ鄭重ニ詫器ヲ保存ス

問 詫器ヲ掘出セル際横穴ノ状態ハ奈何ナリシヤ

答 詫穴ハ予カ所有地ニシテ附近ヲ開墾セントスルキ遇然掘当シニテ穴内ニハ十器刀劍人骨等アツテ土間ニハ小石ヲ敷アリシ

問 穴内ノ状況ハ奈何ナリシヤ

答 上中下ノ三段ニ分レ上段ニハ人骨一体アツテ枕元ニ土器三個アリ中段ニモ同シク人骨一体アツテ枕元ニ土器三個アリ刀劍ハ上段ニアリ下段ハ入口ノ室ニシテ何モ無カリシ但シ此穴ノ略圖ヲ表セハ左ノ如ク

（図省略）

午後吉町ニ於テ民舎ノ入口鴨居ニ病瘡除ノモノアレバ之ヲ求メ次ニ或ル民舎ノ入口鴨居ニ「シヤモヂ」ノ針付ニセラルヲ見ル之ヲ質スニ虫齒ノ「マヂナイ」ト答フ

（図省略）
二十九日午前大磯西端畠地ニ於テ農夫トノ問答左ノ通

問 此辺ノ畠地ニ古塚アリヤ

答 小磯地内字「シヨウジヨウガイ」ト云ヘル畠ニ塚二個アリ碑ニ因レバ昔シ戰爭アツテ當時ノ戰死人ヲ葬リシ處ト云ヒ傳フ

三十一日南下町尾崎吉五郎ヲ訪ヒ漁具ヲ一覽シテ漁法ノ説明ヲ聽ク左ノ通

（図省略）
張リ網

イシモチ（魚名）カマクラエビ（魚名）等ヲ漁獲スルニハ方言イシモチ網又ハ海老網ト称スル網ヲ海中ニ張リ置クハ詫魚ノ泳ギ來テ自ラ網目ニ挾マル仕掛けタリ

此網ノ上端ニ浮木ヲ付ケテ浪間ニ浮ハシ下端ニ「オモリ」ヲ付テ網目ヲ水中ニ直立セシム但シ此網ハ一魚（仮令イシモチ）ヲ獲ルニ適スレド他魚ヲ獲ル能ハズ（第宅圖）方言「ビシ」ヅリ

方言オヅメ
方言「ヲヅメ」ト称スルハ手釣（主トシテ鰯釣ニ用ユ）ニ用ユル要具ニシテ第四圖ノ如キ形チヲナス之ヲ製造スルニハ方言ミヅクサ（ミヅキナリ）ト云ヘル木ヲ五六寸位ノ丸

此具ハ鰯、鯖ヲ漁スルモノニテ圖（第一圖）ノ如ク銅線ヲ筋並曲シ上端ニ「ダグリ糸」ヲ結ビ付ケ中程ニ小網袋ヲツルシ下端ニハ鉛ノ「オモリ」ヲ付ケ銅線ノ曲レル末端ニハ「テグス」糸ヲ結付ケ其末ニ鉤アリ但シ中程ノ網袋ニ餌ヲ入ル此袋ノ側ニ一寸位ニ切タル藁莖ヲ結ヒシハ鰯除ノ為ナリ何トナレバ藁ハ詫魚ニトリテハ毒物ナルニ因ル故ニ此藁ナキハ鰯ニ噛切ラル患アリ

餌ノ種類

中程ノ小網袋ニハ「シラス」（白魚）ヲ入レ鉤ニハ鰯又ハ細目ニ切タル鰯ノ「トモエバ」ヲ用

ユ
釣ノ用法

数百尋ノ「タグリ」糸ニテ海底迄垂下セシメ漁夫指追ニテ「コヅク」ヤ網袋ノ目ヨリ小サキ白魚コボレバ魚泳キ來テ喰フ之ヲ「ステエバ」一名集メ餌ト称スル「コヅク」

每ニ鉤ニ刺セル餌モ自動スルヨリ魚ノ喰フ仕掛けナリ

方言ムツツリ

此具ハ圖（第三圖）ノ如ク割竹ヲ「形ニ曲ケ其中程ニハ絃ノ如ク麻糸ヲ張リ割竹ノ両端ニ細キ麻糸ノ「ワツカ」ヲ付ケ之ニ竹縫メラ貴キテ割竹ノ平均ヲ保タシメ「ワツカ」

ニ丈ケ三四尺ノ「テクス」ヲ付ケ其末ニ「アギ」ナキ鉤アリ此具ヲ魚名大秤ト称シ其中程ニ圖ノ如キ「オモリ」石ヲ糸ニテツルシ石ノ配置ハ一段ニシテ之ヲカラゲシ數條ノ糸末ヲ縛リ付ケ之ニ三百七十ヒロノ手縛ヲ結ヒ付ク尤モ「オモリ」石ヲ縛スルニ

秘術アリ

餌ノ種類
鰯釣ルニハ期節ニ從ヒテ餌ヲ別ニス乃チ「ユワシ」「キワダマグロ」「イカ」等ハ全體ヲ鉤ニ刺シ又ハ細ク刻ミテ刺セリ

用法
鰯ハ潮ノ温度ニ因リテ海中ノ住処ヲ移セルモノナレバ寒中ハ深底ニ遊泳シ春秋ノ頃ハ中底ニ夏ハ浅處ニ居ル尤モ性來海底ノ陰崖ヲ好ミテ浮沈ス

ルナレバ詫魚ヲ漁スルハ頗ル熟練ヲ用スルニテ乃チ「タグリ」糸ヲ傳フテ

「ゴツリ」ト響ケバ曳上ルナレド深底ヨリ「タグル」ナレバ容易ノ業ニアラス之又タ手釣ニシテ指先ノ「コツ」ニ係レリ

資料紹介『大磯旅行記』

佐川和裕・加藤廣美*

本資料は、平成二年度から進めている大磯町史編纂作業の過程で確認されたものである。資料は冊子形態で、学習院大学史料館において「奥州棚倉藩阿部家文書」の中の一資料として管理されている。

さて、本資料は、明治三十年（一八九七）に、当時華族であった阿部正功氏によつて書かれたものである。同氏は奥州棚倉藩主を務めた人物で、麻布霞町にあつた棚倉藩下屋敷を明治以降も私邸としていたといふ。なお、麻布霞町は、現在の東京都港区西麻布一丁目、三丁目、および六本木七丁目にあたる広大な土地で、後の住宅地開発において大きな役割を果たしている（1）。

本資料の内容は、阿部氏が、夏季に家族とともに大磯において滞在した際の記録である。凡そ一二〇頁にもおよぶ同書の構成は大きく二つに分けられる。前半は大磯滞在中の行動を日記的に書いたものである。大磯に滞在することになった理由と共に、明治三十年七月二十八日から八月三十日に麻布霞町へ帰宅するまでの行動が網羅されており、大磯を拠点に酒匂、二宮、国府津、松田、山北方面にまで足をのばしている様子もうかがわれる。

また、後半は、「学術上取調記事」、「小磯地内視察」、「松田山北地方視察」、「小磯村之土俗視察」、「漁夫ノ酒宴」、「高麗村視察」、「サイトバラ井」、「ヤンノヲコッコ」ノ事、「酒匂附近土俗視察」、「大磯益踊視察」、「海濱ニ於ル視察」、「小磯村土俗再調査」、「大磯土俗ノ概略」といった見出しが付されており、前半の行動記録に対応しつつ、実際の取材内容を問答形式にまとめたものである。問答の表記はパターン化されているものの、要旨は十分におさえられている。

筆者の阿部氏は、概して考古学的な知識と興味が強かつたよう、「田石」「オモリ石」「クボミ石」「ミガキ石」と自らが表現している石の存在を、「石世期」の遺物と絡めて盛んに気にとめている。また、土器散在地や塚（古墳）の描写も多く、現在では概に確認できなものや、これまで記録として表れなかつた古墳などが記されていることは本書の大きな魅力となつてゐる（2）。一方で、「土俗」という表現が多用されているように、民俗学的な分野にも興味を抱いていたようで、盛んに農漁民からの聞き取り調査をおこなつてゐる。衣食住にかかる内容はもちろん、漁具や漁法、船などの聞き書きは興味深い。特に「漁夫

ノ酒宴」では、その状況を事細かに観察して描写し、さらには聞き取りによる内容が補充されている点は特筆される。これらもまた現状では聞き取ることのできない事象も少なくない。なかでも「大磯益踊視察」の記載は最たるものであろう。

さて、全体を通しての特徴をいくつか上げておきたい。まず一点めは、聞き取り調査をした話者の姓名を記していることである。また、たとえ姓名の記録が無くとも、かなり詳細に状況を描写しているため、調査に立ち寄った家の特定さえも可能な部分が見られることが多い。二点めは、さまざまなかつた調査対象に対し、多くの場合に現地での呼び名を確認していることである。筆者自身の表現と、地元における呼称との書き分けを意識している点が認められる。三点めは、聞き取り調査や実見した様子、「参考ノ料」とするためには、かなり頻繁に図を描いていることである。これらによつて、現存している資料との比較が容易となり、結論として十分に信頼のにおける記述であることが判断される。まさに民俗誌としてはもちろん、民具誌としても極めて質の高いものといえるだろう。

ところで、記載されている事象については、既に聞き取り調査や当館収蔵資料との比較を通して確認作業を進めており、あらためて本資料の有用性が明らかになりつつある。しかし、本稿ではあくまでも資料紹介が大きな目的であり、また、全文を掲載するだけの紙幅もないため、前半の日記部分を省略し、「学術上取調記事」以降を掲載するにとどまつてある。全文の紹介ならびに記述内容についての細かな考察は、別の機会に報告したいと考えている。なお、本文中には一部不適切な表現もあるが、もとより差別について正しい歴史認識を得た中で、差別解消を目指した所以であることをおことわりしておきたい。

最後に、本稿を執筆するにあたり、「大磯旅行記」の利用についてご快諾くださいました阿部正靖氏、ならびに学習院大学史料館に対しまして厚く御礼申し上げます。

【註】

（1） 加藤仁美「大名屋敷跡地の住宅地形—麻布霞町の場合—」『江戸東京学への招待

「クボミ石」「ミガキ石」と自らが表現している石の存在を、「石世期」の遺物と絡めて盛んに気にとめている。また、土器散在地や塚（古墳）の描写も多く、現在では概に確認できなものや、これまで記録として表れなかつた古墳などが記されていることは本書の大きな魅力となつてゐる（2）。一方で、「土俗」という表現が多用されているように、民俗学的な分野にも興味を抱いていたようで、盛んに農漁民からの聞き取り調査をおこなつてゐる。衣食住にかかる内容はもちろん、漁具や漁法、船などの聞き書きは興味深い。特に「漁夫

ノ酒宴」では、その状況を事細かに観察して描写し、さらには聞き取りによる内容が補充されている点は特筆される。これらもまた現状では聞き取ることのできない事象も少なくない。なかでも「大磯益踊視察」の記載は最たるものであろう。

教育委員会

（＊当館学芸員 **当館臨時職員）